

# 競争社会の動向と現代高校生



酒井 朗

お茶の水女子大学・文教育学部

## □ 競争社会の動向

競争社会と高校生の関わりを書いてほしいと編集部から依頼を受けた。だが、競争は社会の各側面で生じている現象であり、一括りにして論じられるものではない。高校生にとって重要な競争は、そのうち次の二つだろう。一つは大学進学をめぐる競争、もう一つは職場での昇進等をめぐる種々の競争である。本稿ではこれら二つの場における競争の動向を概観した上で、高校生たちの意識・行動がそれらの動向とどのような関係にあるのかについて検討する。はじめに競争の動向について考えてみたい。一口で言う

と、大学進学と職場という二つの場面での競争のあり様は、現在きわめて対照的な動きを見せている。つまり、大学進学をめぐる競争は少なくとも今後数年間は緩和が予想されるのに対し、一方の職場における競争は、今後一層激化するものと考えられるのである。

大学入試における競争は、この雑誌の読者には周知のことと思われるが、少子化を主たる原因として今後緩和することが予想される。矢野（一九九五）によれば、戦後、日本では一貫して大学志願者数が入学定員を上回る超過需要の時代が続いた。大学志願者に対する入学者の割合が最も低かったのは、第一次ベビーブーマーたちが大学に押し寄

せた時である。またとくに一九七五年からは大学の入学定員を抑制してきたため、入試競争が激化するという冬の時代が続いた(木田一九九五)。しかし、九〇年代初めには二百万人あまりいた十八歳人口は、現在急激に減少しており、二〇一〇年には百二十万人を多少上回る程度となる。もはや超過需要の時代は終わりを告げ、今後は超過供給の時代が到来すると言われており、「大学合格率が一〇〇%に近い時代がくるのはほぼ明らかだ」といった予想も出ている(矢野一九九五)。

これとは対照的に職場においては、経済のグローバル化によって、日本の各企業は国際競争に打ち勝つための十分



さかい・あきら ●一九六一年、神奈川県生まれ ●主な論文、著書に Learning to teach in low cultures: Japan and the United States, NY: Garland Publishing Inc., 1995 『中学校教育の新しい展開 第三巻 社会的自立をめざす生徒指導』第一法規、一九九五。『教育言説をどう読むかー教育を語ることばのしくみとはたらき』新曜社、一九九七。『質的研究法による授業研究ー教育学、教育工学、心理学からのアプローチ』北大路書房、一九九七。『教育のエスノグラフィーー学校現場のいま』嵯峨野書院、一九九八。(いずれも共著)

な競争力を確保する必要に迫られている。これに対処するために、多くの企業が従来の年功序列制度を廃し、能力主義的な評価制度を導入して効率的な企業経営を目指し始めている。ちなみに、共同通信社が今年四月二十日に配信した記事によれば、松下電器が二〇〇〇年をめどに年功賃金制度を廃止し、能力を重視した賃金体系に変える方針を明らかにしている。大手の電機メーカーでは富士通も同様の方針を打ち出しているという。また、金融界では今年四月一日に改正外為法と新しい日銀法が施行され、日本版の金融ビッグバンが幕を明けた。銀行、証券、保険の各業態間の相互参入が本格化することで、各企業とも生き残りをかけて熾烈な競争を展開している。

かつて、日本では十八歳の日で人生が決まるとまで言われた。大学入試に合格するか否かで、その後の人生が大きく左右されるということである。競争はその一日に集中し、その一日における勝利を目指して、激しい競争が展開された。大学に受かれば、しかもそれがいわゆる一流大学であればなおさら、就職口を探すことは容易であり、なおかつ一旦就職してしまえば後は年功序列制度ののって昇進することができた。このように、これまで日本における競争は、まさに大学入学時点で集中的に課せられてきたので

ある。しかし、今や熾烈な競争の場面はそれより後の段階に移行しようとしている。今は不況のために就職そのものもきわめて厳しいが、たとえ景気が上向いたとしても、その後の職業生活における競争は大学入試競争とは比べものにならないほど長期にわたり継続する。こうした意味で、高校生をとりまく社会はこれまで以上に過酷な競争を彼らに課せようとしていると言つてよい。

### ㊦ 競争から降りる高校生

ではいつたい、このような状況の下、当の高校生自身はどのような態度や意識を持っているのだろうか。いくつかの資料をもとに今の高校生の学習への構えや友だちとの関係、あるいは将来への展望を見てみることにしたい。結論を先に述べれば、今日、高校生はきわめて対照的な二つの競争の場面のうち、大学進学競争の緩和という流れに適合的な構えを志向している。机にかじりついて勉強するという姿はかつてほど見られなくなり、また大きな野心を抱いて他人と競り合つていこうという気持ちも薄れてきている。反対に言えば、今の高校生に支配的な意識・態度はその後が続く職業生活での競争にはあまり適合的ではないようだ。

学習面については、近年様々な形で高校生の勉強離れが示唆されている。その一つの兆候は履修科目数の減少である。いわゆる多様化路線の中で、一九七〇年以降科目履修率は多くの科目で著しく減少した。たとえば物理は、かつて高校生のほぼ全員が履修していたが、現在では三割を切っている（飯利一九九四）。ただし読者の中には、これは単に履修する教科の数が減っただけで、それぞれの科目においては以前よりも熱心に勉強しているのではないか、したがって総量としての学習時間は従来と同等ないしそれ以上ではないかと考える人もいるだろう。だが、この点でも現状は生徒の勉強離れを示している。たとえば表1-1と表1-2は一九八〇年と一九九〇年に実施された調査から高校二年生の学習時間だけを抜粋して比較したものである。いずれの調査結果も、高校を国立大学合格者数を基準にグループ分けしてまとめた。分類の仕方は若干異なるが、八年調査でAグループに分類された学校群は、九〇年調査のWグループとXグループの中間に、また八〇年調査のDグループは九〇年調査のZグループにはほぼ相当する。このようにまとめた上で比較してみると、いずれのグループでも生徒の勉強時間は九〇年の方がかなり短い。たとえば、一九八〇年調査のAグループの高校では生徒の八割は平日

表1-1 高校2年生の家庭での学習時間 (1980年) (%)

1980年度国立大学 合格者数(a) による学校分類	ほとんどしない	2時間未満	2時間以上	計(N)
A (a=平均191名)	2.4	19.3	78.3	100.0(502人)
B (a=平均77名)	10.7	33.3	56.0	100.0(394人)
C (a=平均29名)	15.7	47.9	36.4	100.0(725人)
D (a=平均1.7名)	14.0	49.8	36.2	100.0(393人)

(表は、深谷昌志『モノグラフ・高校生'81』1981, vol.3、福武書店、7頁及び10頁より作成。  
調査時期は1980年9月～10月)

表1-2 高校2年生の学校外での学習時間 (1990年) (%)

1990年度国立大学 合格者数(b) による学校分類	ほとんどしない	2時間未満	2時間以上	N.A.	計(N)
W*	10.7	29.9	57.5	1.9	100.0(422人)
X (b=100名以上)	9.7	34.4	54.8	1.1	100.0(621人)
Y (b=10名以上)	14.8	42.2	41.2	1.8	100.0(562人)
Z (b=10名未満)	37.0	45.8	16.4	0.8	100.0(400人)

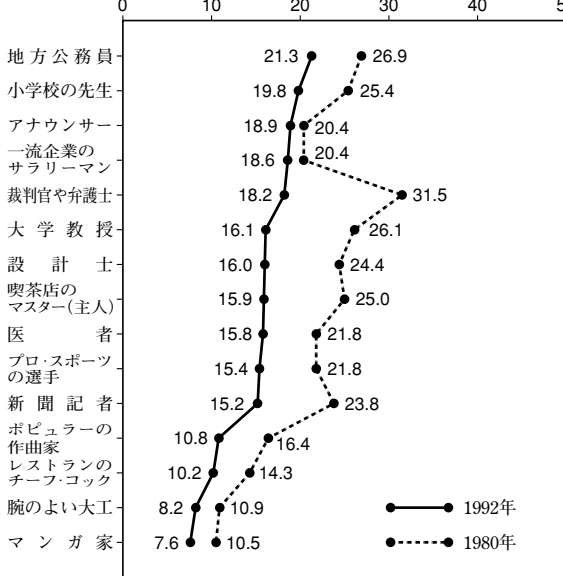
\*国立大学合格者が200名以上で、かつ東大、京大合格者10名以上  
(表は、耳塚寛明他『研究所報 vol.5、学習基本調査報告書—高校生版—』福武書店教育研  
究所、1991、21頁より作成。調査時期は1990年9月～10月)

出典 酒井朗「一昔前の高校生から見た現代高校生」『大学進学研究』1994年9月号、18頁

でも二時間は家庭学習を行っていた。しかし、九〇年調査ではWグループの高校でもXグループの高校でも、学校外での学習時間の総計が二時間以上の者は五割強でしかなかった。

また、学習に動機づけられるには高いアスペリション（Ⅱ将来の進路に対する野心や志向性の度合い）を持つことが効果的だが、この点でも近年は生徒の意欲減退がみられるようだ。図1は、一九八〇年に高校生を対象に将来なりたい職業について尋ねた結果を、同じ質問を用いて一九九二年の生徒に尋ねた結果と比較したものである。いずれもいわゆる進学校を選び、調査対象者にはいくつかの職種を提示して、その職種につきたいかどうかを尋ねた。その結果明らかにしたのは、一九九二年時点の高校生の方が、用意されたすべての職種において「なりたくない」と答えた者の割合が減少したことである。経済や社会状況が変化すれば人気職種に変化が生じるので、アスペリションが同程度でも世代が違えばある職種では希望者の減少がみられることもあるだろう。だがそうした変動では、すべての職種で希望者の割合が低下するという現象は説明できない。そう考えると、この調査結果は九〇年代における高校生のアスペリションの全般的な低下を意味していると思われる。

図1 なりたい職種（10年前と比べて） (%)



(出典 福武書店教育研究所『モノグラフ・高校生'92』vol.36、1992、22頁)

る。

アスピレーション・クライシスと言われるこうした傾向を具体的な形で反映しているのは、卒業後、進学も就職もせずに無業者として生活している人々の増加だろう。粒来（一九九七）が東京都内十三高校の三年生を対象に調査した結果によれば、進路が未定ないし卒業後はアルバイトを続けるという生徒が調査対象者全体の約二割に達した。無業者に至る理由は様々だろうが、それが実質的に進学や就職に伴う種々の競争からの離脱であることは確かだ。

また、友だち関係においても彼らは競争的な関係を忌避する傾向が強い。『モノグラフ高校生』は昨年三月、「高校生の競争観と共生観」と題した調査の報告を行っている（ベネッセ教育研究所一九九七）。これによると、調査した二千余名の高校生のうち、「クラスメートの中に勉強上のライバルがない」と答えた者が全体の五五%に達した。また、定期テストの順位でクラスメートと張り合ったり、負けたくないと思うかと尋ねたところでも、「かなりそう思う」と答えた者は二割にすぎず、全体の三分の一は「そういう気にならない」と答えている。入学したい大学・短大・専門学校についてクラスメートと張り合う気持ちがないと答えた者はさらに多く、五六%にまで達した。この調

查の対象となった東京、山梨、北海道の四つの高校は、超エリート校というわけではないものの、それぞれ地域の中では進学校として認められた学校である。この調査の結果は、そのような進学校の生徒においてさえ、他者と競争しようという気持ちが薄れつつあることを示している。

なお、このことに関連して、この部分をまとめた現職の高校教師が一つのエピソードを紹介している。それは推薦入試の学内選抜に関わる生徒の行動についてである。生徒たちは、最初は学内選抜に通ろうと必死になるが、いざ決まる段階になると自分たちで他の生徒と出願校がかち合わないように事前調整してしまうというのである。執筆した教師は、これを見て、「生徒は人のテリトリーを荒らさず、見事に住み分けてしまう」のだとまとめている。他人となるべく争いを避け、自分も他人も傷つかなないようにしたいという彼らの意識を見て取ることが出来る。

以上のように、今の高校生は総じて競争的な関係に入ったり、そこで勝つために努力することを避ける傾向が強い。将来の展望においても、また他者との関係においても、目標に向かってがんばったり、他者と張り合ったりという競争的な態度をとろうとしないのである。

### Ⅲ 生徒から若者へ

#### — 学校的な価値の無意味化

それではなぜ、今の高校生は競争的な関係を避けようとするのだろうか。おそらく多くの人は、少子化に伴って大入試が緩和されたことが原因だと考えるに違いない。入試倍率が下がれば、あくせく勉強しなくても、また高いアスピレーションを持たずともなんとかうまくやっていけると考えられるからだ。しかし、人口変動を細かくみていくと、第二次ベビーブーマーたちが十八歳になったのは一九九〇年代に入ってからであり、その時点での競争は八〇年代よりも激しかった。しかし、前節で紹介したようにすでに九〇年代初めにおいても、競争に対する高校生の意識や構えは八〇年代のそれとは大きく異なる。とすると、理由は少子化や大入試の緩和に求めるべきではないようだ。

それよりもむしろ重要なのは、生徒にとって学校的な価値が以前ほど意味を持たなくなったことだ。高校生の意識や態度を捉えるには、彼らが生徒という役割を期待されていることと同時に、十五―十七歳という若者期の真っ直中にあるということにも留意する必要がある。この点をふまえて高校生の社会的な位置づけと彼らの意識の変化を追って

いくと、八〇年代半ば頃までの高校生はどちらかといえば前者の「生徒である自分」に強くこだわっていたが、八〇年代後半以降は、むしろ後者の「若者である自分」の方により大きな意味を感じるようになってきたことが分かる。

このことが学校や勉強の意味を希薄にさせ、また学校を通じての上昇移動欲求を弱めたのである（酒井一九九六）。

このことを象徴する一つの例は「ツツパリ」の消滅である。八〇年代はじめごろ、高校生の中には「ツツパリ」という下位文化があった。男子は長ランにリーゼント、女生徒は長いスカートでセーラー服のリボンをできるだけ小さく結ぶというのがおしゃれだった。また、学生鞆をべちゃんこにつぶして、教科書が入らないことを誇示して見せたのも彼らであった。支配的な文化は、その文化の逸脱者が何に対してどう逸脱しているかを見ることで明らかにする。こういう観点からツツパリを見ると、彼らの世代が学校にいかにも強くこだわっていたかがよく分かる。ツツパリはまさに学校文化に対して突っ張って反抗して見せたわけであり、当時の高校生にとってはそれほどまでに学校的な価値は大きな意味をもっていた。こうした中で、生徒たちはお互いをライバル視し、競争へと駆り立てられていったのだと思われる。

しかし、その後ツツパリは都市部から徐々に姿を消し、今では田舎の高校でも見かけることはない。それにかわって今の高校生にとって重要なのは、消費社会の中で若者としての自分をいかに演出するかということである。彼らのファッションには反抗的な意味あいは消え、街（ストリート）においてティーンエージャーとしての自分を演出する手だてという意味あいが強くなった。かつてのツツパリにとって、服装は反抗のための異装であり、いわゆる「不良」とそれ以外の生徒の間には外見上明白な境界線があった（森一九九四）。しかし、今の高校生にはそうした境界はなくなり、みなが街の中でそれぞれにオシヤレであろうと努力している。

学校を通じて幸せを勝ちとるためには欲求充足を延期して努力することが重要であった。だが、街において自分らしさを演じるために必要なのは競争に勝つことではない。それよりも、自己を演出するための十分な金銭を得ることや演出のための豊富な情報を得ることの方が重要である。宮台（一九九五）は、高校生はいま、終わらない日常をまったりと生きていると指摘しているが、この時間の見通しの欠落、そしてその場その場での自分らしさの演出こそが、街を生きる高校生の生き方なのである。

八〇年代以降急速に若者に押し寄せた消費文化の波は、まず大学のキャンパスを一変させた。七〇年代の大学紛争後の『アノミー的な貧乏学生は姿を消し、『なんとなくクリスタル』に象徴されるブランド物に囲まれた学生生活が注目浴び、女子大生ブームが訪れた。この波がその後高校生へと及び、多くの企業が彼らを重要な消費の担い手として発見した。この中で、高校生たちは自らの居場所を学校から街へと移していったものと思われる。清矢（一九九四）が指摘するように、より高い点をとるためにがんばるという競争志向的な態度は学校教育を通じて学習されるものである。しかしいま、学校の影響力が弱まる中で、高校生たちは学校が彼らに植え付けようとした競争志向の構えを失いつつある。

#### 四 まとめ

ここでは、現代社会における競争のあり様と高校生の意識・態度との関連を様々な角度から眺めてみた。既存の調査データが示しているのは、いずれも多くの高校生が競争から降りようとしていることである。そうした傾向は、少子化にともなう大学入試の緩和という側面には適合的な構えかもしれない。しかし、目を外部社会に向け、彼らが将

来就くであろう職場で今後予想される熾烈な競争を思うと、いまの高校生の構えは将来多くの困難をもたらすものと思われる。かりに日本企業が今後も国内で人材を調達しようとするれば、いまの高校生の競争離れは企業全体の競争力低下にもつながるだろう。

高校生の指導においてどのような方向を選択するのか。これは今後の議論を待つことになるのだと思われるが、それでも最後に今回のテーマに関していくつか指摘しておきたいと思う。一つは、現在の市場経済システムにおいては、競争原理は基本的に支持されていることである。個々人にとってその原理は、業績主義的な評価を前提とするという意味で民主的な側面を有している。また、競争によつて優秀な人材がそれにふさわしいポストにつけるといふ仕組みは、適材適所を促し社会の維持・発展に貢献するとも考えられている。以上の二点を踏まえると、競争社会に適応できる構えを培うことは決して道徳的に非難されるべきものではない。競争があまりに過度である場合、それは抑制されるべきであろうが、競争そのものを否定すべきではない。しかしながら、とくに臨時教育審議会以降の教育政策の流れでは、教育に競争的な関係をもちこむこと自体にかなり批判的な論調が多い。観点別評価への移行などはそうした



流れを汲んでいる。

前節で述べたように、高校生の構えの変容には外部の消費社会の影響が大きいと思われるが、もう一方でそうした影響に歯止めをかけず、むしろその流れに迎合するような改革を実施してきた教育政策のあり方にも問題があるように思われる。デュルケームの指摘を待つまでもなく、教育は次代の社会を再生産していくための方法的社会化である。いまの高校生は消費社会に大きく影響されているが、彼らは消費者であると同時に生産者として次代の社会を築く主体となるべき人々でもある。個性化・個別化の重要性が唱えられ生徒たちの要求に出来る限り応えようとする方向で改革は進んでいるが、もう一方で学校教育は将来の競争社会を生き抜くだけの資質や構えを備えた人間の育成を課題としている。我々は今の高校生が置かれている状況を総合的に捉えた上で、彼らへの指導のあり方を再考すべきではないだろうか。

〈注〉

飯利雄一『理工系離れ』と科学教育の課題——初等・中等教育の立場から』『大学進学研究』一九九四年十一月号、一二～一七頁

木田 宏「教養豊かな大人の社会へ」『IDE現代の高等

教育』一九九五年九月号、一六～二二頁

酒井 朗「社会の変化と現代高校生」『月刊高校教育』一九九六年十月号、一四～二〇頁

清矢良崇『人間形成のエスノメソドロジー——社会化過程の理論と実証』東洋館出版社、一九九四年

粒来 香「高校無業者層の研究」『教育社会学研究』第六十一集、一九九七年、一八五～二〇九頁

ベネッセ教育研究所『モノグラフ・高校生'97』Vol.9、一九九七年

宮台真司『終わりなき日常を生きろ——オウム完全克服マニュアル——』筑摩書房、一九九五年

森 伸之「不可視化した境界」『季刊子ども学』Vol.4、一九九四年、一五八～一六〇頁

矢野眞和「二〇一〇年のシナリオ」『IDE現代の高等教育』一九九五年九月号、三九～四四頁